誰かが立っている

市川澪里

あれは何時間たった頃だろうか。
疲れていたからすぐに寝落ちしたはずなのに。
ふと眠りから覚めた。
人の気配を感じて。
誰かが立っている。
私のすぐそばで。
泥棒だったらいけないと思って、とりあえず寝たふりをして、携帯をにぎろうとした。

あれ、動かない。

手も足も首も。瞼さえも。
初めて感じる重力。
急に湧いて出る冷や汗。
急に早くなる心臓。
体中が焦っていた。

うごけうごけうごけ
ずっと唱えた呪文。
どく　どく　どく
何度唱えても動くのは心臓だけ。

なんでなんでなんで
覚えのない拷問にかけられた。

どくん　どくん　どくん
それでも答えるのはさらに早くなる心臓だけ。

ごめんなさいごめんなさいごめんなさい
追い詰められて途方もなく謝るのは昔からの癖。
ばくん　ばくん　ばくん
聞いたこともない音をたてる心臓だけ。
それだけがずっとこの静かな部屋で響きわたる。

初めての金縛りは、
初めて私に死を覚悟させた。